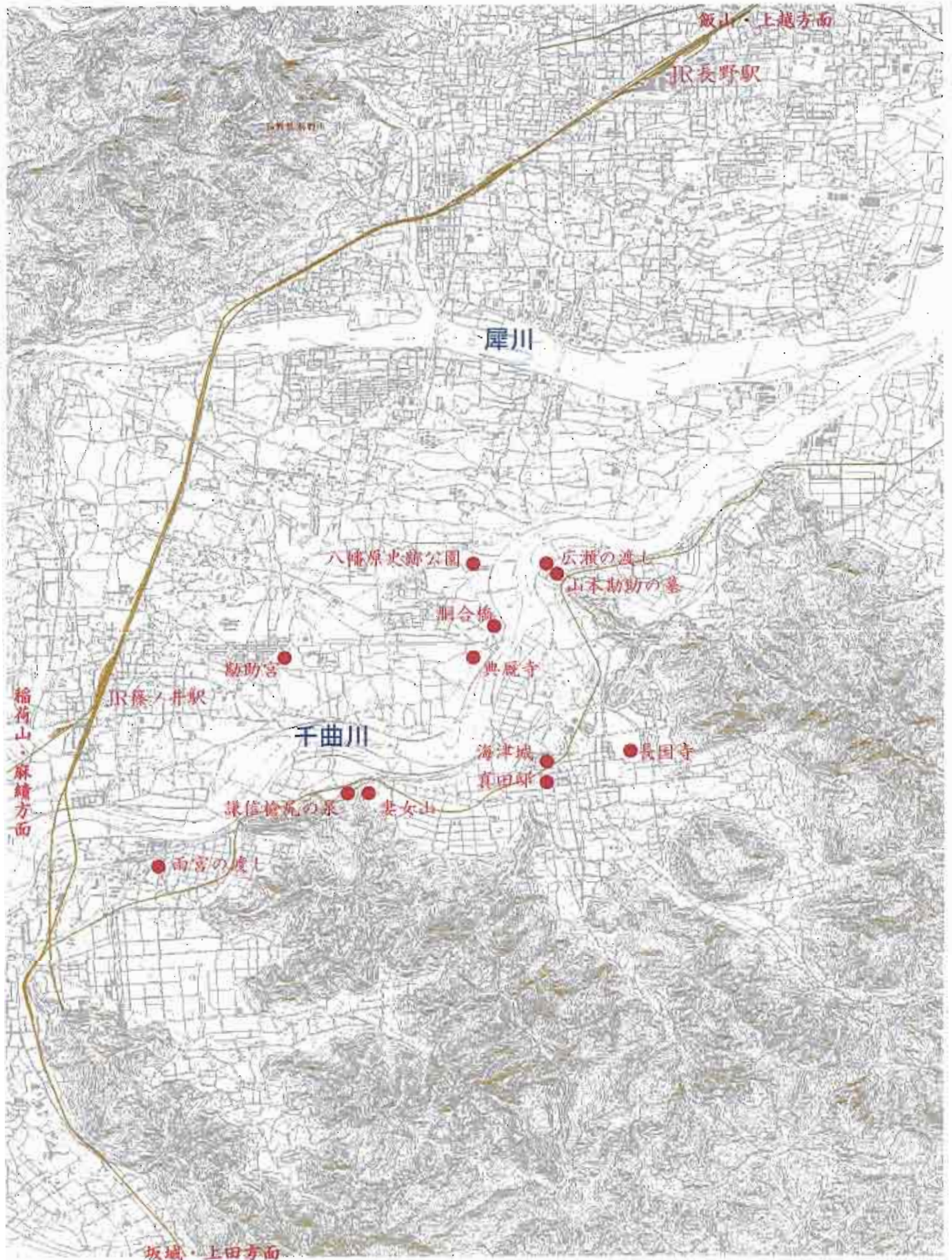


# 川中島古戦場 をゆく

3年B組 鈴木 順夫



# 其の1 川中島エリア



国土地理院より2500分の1地勢図(上から長野、信濃松代)

# 妻女山



妻女山から川中島平を望む(25年8月1日撮影)

妻女山は、永禄4年(1561)9月10日の第4次川中島の戦いの折、越後勢の上杉謙信が本陣を設けた場所である。ここからは、川中島平を一望でき、海津城の動静も伺い知ることができた。同年9月9日、海津城から黙々と立ち上る炊煙を見た謙信は、武田方の戦いの準備があることを察し、同日の夜半、山を下り千曲川を渡って八幡原を目指して進軍した。

なお、現在の妻女山には、明治の戊辰戦争の際に松代真田藩の藩士として従軍し戦死した53名の御霊を祀る、松代妻女山招魂寺がある。また、展望台が設置されており、山頂から川中島平一帯を望むことができる。



謙信槍尻の泉(25年8月1日撮影)

妻女山の登り口には、謙信槍尻の泉がある。永禄4年(1561)9月10日の第4次川中島の戦いの折、妻女山に本陣を置いた謙信は、戦いの勝利を神仏に祈願するため、山麓の会津比売神社などに赴いていた。

ある時、帰途に就いた謙信は、あまりにのどが渇いたので、馬から降り家来の直江山城守に槍を貸せと命じ、「妻女におわすよろずの神よ、我に清き水を与えたまえ」と地に伏し一心に祈り、地面に槍をついたところ、勢いよく水が湧きでたという。

# 雨宮の渡し



雨宮の渡し(25年8月1日撮影)

雨宮の渡しは、北国街道の要衝にあって、千曲川渡船場としても重要な場所であった。

永禄4年(1561)9月10日の第4次川中島の戦いの折り、上杉軍はこの雨宮の渡しで千曲川を渡った。現在は、川の流れも変わり、当時の面影を残してはいないが、謙信奇襲の川中島合戦を詠んだ頼山陽の歌碑が建てられている。

鞭聲肅肅夜河を過る  
暁に見る千兵の大牙を擁するを  
遺恨なり十年一劍を磨き  
流星光底に長蛇を逸す

雨宮の渡しの歌碑(25年8月1日撮影)



## 広瀬の渡し



永禄4年(1561)の第4次川中島の戦いの折り、武田信玄は、同年8月24日に川中島に到着し、当初は茶臼山に陣取った。しかし、同月29日、武田軍は突如千曲川を渡り海津城に入城した。そのときに、武田軍が渡ったのが広瀬の渡しである。江戸時代には、善光寺詣りに訪れる人々に利用されたという。

広瀬の渡し

(25年8月1日撮影)

## 山本勘助の墓



山本勘助は、三河国(現在の愛知県)の出身で26歳の時から諸国をめぐって修行し、兵法・槍術・築城術など武芸百般を体得し、44歳にして武田信玄の軍師となった。数々の策略を手掛け、海津城の構築も手掛けたといわれている。第4次川中島の戦いにおいては、有名な啄木鳥戦法を信玄に提案したといわれ、9月10日の八幡原での戦いの際、武田軍が苦戦に陥った責任を感じ討ち死した。

勘助の墓は、はじめは陣ヶ瀬の東の勘助塚にあったとされるが、千曲川の流れにより荒廃してしまったため、元文4年(1739)に松代藩家老の鎌原重栄・原正盛が現在の場所に墓碑を建立した。

ただし、勘助の存在については諸説あり、甲陽軍艦に登場するほか市川文書に山本管助という人物が一度登場するのみである。また、高遠城の勘助郭を山本勘助が築いたことや、現在の勘助の墓が当時のものだという裏付けはない。そのため、甲陽軍艦に見えるような、天才軍師である山本勘助が実在したかどうかは定かではない。

山本勘助の墓(25年8月1日撮影)

# 海津城 (松代城)



松代城太鼓門(23年7月27日撮影)



松代城櫓跡(23年7月27日撮影)



松代城復元図(23年7月27日撮影)

海津城は松代城とも呼ばれ、国指定史跡である。永禄3年(1560)頃、信玄が謙信に対する川中島の前線基地として築城したのが始まりで、当時は海津城と呼ばれた。この城には、武田方の高坂弾正昌信が城将として入っていた。第4次川中島の戦いの際には、当初は高坂弾正率いる3000の兵が海津城にこもっており、信玄本隊17000の軍が到着してからは、武田軍の本陣であった。

武田氏滅亡後は、城主が再三変わり、城名もそれに伴って変わった。森忠政のときには「待城」、松平忠輝のときには「松城」と呼ばれ、元和8年(1622)に真田氏が上田から移封されてからは真田氏10代の居城と

なった。そして、正徳元年(1711)に「松代城」と改められた。

海津城は、東・南・北の三方向を山に囲まれ、西側には千曲川が流れており、自然の要害の利用した平城であった。城形は、本丸を一番奥にして、二の丸、三の丸が本丸を囲むように正面に広がる梯郭式と呼ばれるもので、天守閣はなかった。明治5年(1872)に廃城となり、現在の城は、江戸時代のものの再現である。海津城の時代には、石垣や大規模な櫓、櫓門などはなかったとされ、土塁や堀に囲まれた城であった。

また、松代城の城下町には、佐久間象山を祀った象山神社や、長国寺、真田邸、真田文武学校、真田宝物館などの数多くの史跡が残っている。



真田邸  
(23年7月27日撮影)



長国寺  
(23年7月28日撮影)

## 典厩寺



典厩寺(25年8月1日撮影)



閻魔大王像(25年8月1日撮影)

典厩寺は、第4次川中島の戦いの際に両軍の激突があった八幡原古戦場に位置し、川中島の合戦ゆかりの寺である。境内には、日本一大きい閻魔大王像、典厩信繁の墓、両雄合戦の碑、信玄愛石、謙信力石などがあるほか、川中島合戦記念館には約60点の資料が展示されている。



典厩信繁の墓(25年8月1日撮影)

典厩信繁像と信繁の兜(25年8月1日撮影)

典厩寺は、川中島の合戦当時は鶴巣寺と号し、永禄4年の第4次川中島の戦いの際、信玄の実弟である武田典厩信繁の陣営地であった。信繁は、信玄本陣へと迫る上杉軍の前に立ちはだかり、武田軍の本陣を死守し、壮絶な戦死を遂げた。元和8年に信繁の名前である典厩をとって寺号を典厩寺と改め、信繁をはじめとする川中島戦死者を吊り祀る場所となった。

信繁は大永5年(1525)に生まれ、信玄とは4歳違いの実弟であった。元服した後は左馬助という官職を名乗り、この左馬助の唐名が典厩であることから典厩信繁と呼ばれるようになった。信繁の器量や誠実さは信玄にも高く評価され、領地の支配や軍事作戦などの重要な役割の多くを任された。また、「弟とはかくあるべし」との思いを寄せていた真田昌幸は、次男の幸村に典厩信繁から名をとり真田信繁と名づけたほど、武田信繁は名高き武将であった。

## 勘助宮・胴合橋



勘助宮(25年8月1日撮影)

勘助宮は、もともとは今の位置より北東100mの場所にあり、永禄4年の八幡原での合戦で、山本勘助が討ち死した場所だといわれている。



胴合橋(25年8月1日撮影)

胴合橋は、敵の手に渡っていた勘助の首を武田方の家来が奪い返し、胴体とつなぎ合わせた場所だといわれている。



# 八幡原史跡公園



謙信・信玄の一騎打ち像(25年8月1日撮影)



三太刀七太刀の碑(25年8月1日撮影)

八幡原史跡公園は、史跡公園の北西端の八幡社地を中心に昭和47年(1972)に造成された。現在公園がある場所は、永禄4年9月10日の川中島の戦いのときに、信玄の本陣があった場所である。「甲越信戦録」によれば、この八幡社は山本勘助が海津城を築くときに水除け八幡として、この地に勧請したと伝えている。

公園内には、一騎打ち像をはじめ、三太刀七太刀跡碑、信玄本陣の増形陣地の土墨跡、首塚、八幡社社殿などがある。また、一角には長野市立博物館もある。

八幡社は永禄4年の第4次川中島の戦いのとき、激戦地となったため、社殿は破壊された。そこで信玄は海津城代の高坂弾正昌信に命じて社殿を再建させ、社領としての土地を寄進したといわれている。

八幡原での合戦の際、謙信は乱戦で信玄本陣が手薄になっているのを見ると、旗本数騎をつれて敵の本陣を強襲した。謙信は3度太刀をふるい、信玄は一度は軍配でそれを受けたが、二の太刀で腕に、三の太刀で肩に傷を負った。信玄の軍配には刀の跡が7ヶ所あったことから、一騎打ちの跡を三太刀七太刀の跡という。



首塚(25年8月1日撮影)

高坂弾正が、数千人の死者を敵味方なく手厚く葬ったとされる。



執念の石(25年8月1日撮影)

## 其の2 千曲・坂城エリア



国土地理院より2500分の1地勢図(左上から順に稲荷山、信濃松代、麻績、坂城)

### 葛尾城



坂城町から葛尾城を望む(25年8月2日撮影)

葛尾城は、坂木の豪族である村上義清の居城であった。葛尾城は五里ヶ峰から南に伸びた葛尾山頂が本郭で、その南には出城の姫城がある。天文22年(1553)4月、武田軍の攻撃で自落した。義清は高梨氏を通じて越後の上杉謙信を頼り、これが11年間に及ぶ川中島の戦いのきっかけとなった。

村上氏の勢力基盤は、塩田平と坂城以北の更埴地方で、葛尾城は南から攻める敵を想定して築城されている。北側には、千曲川右岸を善光寺方面に行く往還道があり、この道は戦国期には、城の搦手を通り、刈屋原と磯部の境に下り、坂木の渡しから千曲川の右岸に出た。したがって、搦め手を通るこの道は、合戦時は輸送路ともなり、逃げ道にもなった。



(<http://www.furin-kazan.jp/nagano/index.php>より)

## 荒砥城



荒砥城二の丸城門(25年8月2日撮影)

荒砥城は、村上氏の支族である山田氏によって築かれた山城で、山田城、砥沢城とも呼ばれる。川中島合戦の頃には武田軍、上杉軍による争奪戦が繰り広げられた。

天正10年(1582)の武田氏滅亡後、上杉景勝の川中島統治時代には屋代秀正が海津城副将となり、荒砥城は清野・寺尾・西条・大室・保科・網島・綿内の各氏による城番管理がなされた。翌天正11年、屋代秀正は徳川家康と通じて荒砥城に籠城し謀反をおこしたが、後に上杉諸將に攻められ落城したと伝えられている。

現在は、城山史跡公園となっており、中世の史実に基づいて館や見張り台、兵舎、門などが復元され、戦国時代の山城の姿を現代によみがえらせている。また、NHK大河ドラマ「風林火山」や「江〜姫たちの戦国〜」などのロケにも使われた。



荒砥城二の丸櫓(25年8月2日撮影)



荒砥城から上田方面を望む(25年8月2日撮影)



城山史跡公園航空写真(左上)と荒砥城復元図(右上)(千曲市城山史跡公園パンフレットより)

荒砥城は、中世の山城の構造をよく復元していると思う。尾根上にいくつもの曲輪が築かれている。また、石垣はほとんど使用されず、堀切や空堀、土塁、乱杭が城のメイン防御装備である。また、櫓は高いところから敵を見はるものであって、近世のように櫓から矢や鉄砲を放つとは考えにくい。また、荒砥城のように曲輪が連なるように並んでいる構造を連郭式というが、山の構造を利用し、山の尾根にそった連郭式山城が作られることが多かったと僕は推測する。